

南スーダンでは2011年にスーダンから独立した現時点でも新しい国家である。面積は約64万平方キロメートルで日本の約1・7倍、人口は約1500万人（23年時点）。首都はジュバで、白ナイル川沿いに位置する。民族はディンカ族やヌエル族など多様で、公用語は英語。宗教はキリスト教が多数を占める。

長年の内戦と政治的不安定により、経済やインフラ整備は大きな課題となっているが、国際社会の支援のもとで復興と国家建設が進行中である。石油資源は豊富だが、持続可能な開発には平和の定着と基盤整備が不可欠であり、こうした背景の中、日本を含む国際的なインフラ支援が地域の安定と発展に貢献している。

海外建設協会

プロジェクト便り

◆南スーダン

ジュバ市内橋梁建設計画

大日本土木

地域の安定と発展に貢献

ジュバ市内では、内戦の影響特に幹線道路上の橋梁は幅が狭く、インフラ整備が著しく遅れており、多くの未舗装道路が存在している。この課題に対応するため、日本政府は南スーダン政府と連携し、「ジュバ市内橋梁建設計画」を立案。16年に閣議決定されたが、当時の治安悪化により事業は一時中断された。

20年に国民統一暫定政府が発足し、治安が改善。21年に再度事業化調査が実施され、橋梁整備のニーズが再確認された。そして22年に供与契約が締結され、ジュバ市内の3橋の架け替え工事が開始された。

本計画は、安全な通行の確保と交通容量の拡大を通じて、ジュバ市の交

洪水に耐える強固な支保工による上部工の構築



洪水に耐える強固な支保工組み立て



平たん性を確保した高品質なコンクリート舗装を実現

小限にとどめ、南スーダン人主体の施工チームを編成する計画とした。大日本土木の社員以外は日本人機械工1人、第三国籍スタッフが約10人、そして南スーダン人作業員最大150人で構成されたチームにより、工期内で竣工を達成することができた。

橋梁形式は橋長平均13メートルのRC床版橋。下部工は1橋が場所打ち杭基礎、残り2橋が直接基礎。一見簡易な構造だが、雨期に頻発するスコールによる急激な増水が施工の大きな障害となった。フーチングコンクリート打設前日に洪水が発生し、型枠内に土砂やごみが流入、打設を1週間延期する事態もあった。

現場では限られた資材を工夫して活用し、洪水に耐える強固な支保工を組み立てて上部工を完成。取付道路（各橋平均150メートル）にはコンクリート舗装が採用され、平たん性確保のためブリツスクリートを導入。試験施工を重ね、第三国籍スタッフおよび南スーダン人スタッフの技術を上向きに、品質の高い舗装を実現した。

現場全体が一丸となって取り組んだ結果、25年1月末の工期を前倒しし、24年12月10日に竣工式を行うことができた。3橋とも開通後は順調に機能し、交通のボトルネックとなっていた渋滞も大幅に緩和された。

南スーダンでは「MADE IN JAPAN」のインフラに対する信頼が厚く、今後も同国の発展を支えるインフラ整備が期待されている。一方で、今年3月には治安情勢の悪化により外務省の危険情報レベル4（退避勧告）に引き上げられ、9月現在もレベル4が継続中である。大きな可能性を秘めたこの国が一日も早く安定し、持続的な発展を遂げることを願う。

（大日本土木海外支店土木部担当課長・海津広寿）

